

集は貝瀬幸咲氏)が、解村記念というべき『城内郷土誌』を発刊した。内容は、第一部の「城内総覧」、第二部の城内の地区沿革史、第三部の城内地域の民生民俗、に分かれる。(図2)

前掲の『遺稿城内史料』とだぶる内容を含むが、第一部は自然環境、戸口と村政、産業、教育、若い衆の今昔、第二部は沿革の総観、大字の沿革、寺社の沿革、中世文書・古城址・古碑、近世文書、第三部は年中行事、農業歴と百姓仕事、衣食住、冠婚葬祭、民間信仰、言語と民話、娯楽と民謡、などから

成る。

大字の沿革に関わって、村々の開村年代が問題となる。城内二五か村には新田七か村を含み、いずれの新田も白布高・青草高を含まない。これらの村は松平光長の高田藩時代に開発されたと考えられる。

幕府が全国に作成を命じた正保二年(一六四五)の国絵図には、泉新田(二七石余)が載るだけである。同新田は、寛永九年(一六三二)に本田と村境

いたのか、明らかではないが、いくつかの段階を経て、藩や幕府の公的な帳簿に載るようになったものであろう。

なお、農作業や食膳の挿絵も理解しやすく描かれ、編集者の力量がしのばれる。*

第三は、廣井正氏が平成十六年に古希を迎え、手作りで刊行した『城内谷の天和検地』である。廣井氏は『上原誌』の編集にも携わり、調査を城内の全域に広げた。

調査結果は、村別の個人別面積、地名別面積、位別石盛り、名請人一覧にまとめた。さらに、村の成立事情を考察し、泉小新田の検地、土地の売買や御蔵に関する資料などにも触れている。これだけの古文書や検地帳を閲覧することは、容易でないと考えられる。『六日町史』通史編でも利用させていた。いた。

第四は、井口亘氏の『私説城内史 八海山のほら』上・下巻(平成十九)である。井口氏は、題名

を定め、同十二年に第一回の検地(二七石余)を受け、同十八年、第二回の検地(三九石八斗余)、慶安五年(一六五二)に第三回の検地(一三八石余)を受け、ようやく村高が決まった。このうち、第一回の検地結果が正保の国絵図に載ったことになる。

このように、新田の成立年代を確定するのは容易ではないし、それだけに、検地の結果のみで確定することはできない。さしあたって、村の伝承と資料を突き合わせながら考えるしかないと思われる。

たとえば、文化三年(一八〇六)の「六日町組地志書上げ帳」には、下原新田の成立を「慶安年中、下原村百姓三郎兵衛と申す者、開発仕り候由、申し

伝え候」とある。しかし、資料によれば、正保二年に岡村・山口村と山境を争い、知行主の萩田主馬の裁許を受けている。したがって、すくなくとも同年の正保絵図に載っていないことから、藩が公認した成立年は後年であった可能性がある。そもそも、高田藩は村の成立について、どのような基準を設けて

の「ホラ」を、八海山に住むというホラ、法螺貝のホラ、ホラ吹きホラ、どっちにとってももらってもいい、と断っている。

地域の歴史には、資料不足のため、不明部分が多い。熟語の読みが分からない場合、読みが分かっても意味を解釈できない場合などもある。中央で発行した文献にも答えは出ていない。そういう条件のなかで、書き進めるには、前後の関係や他地域との関係を踏まえて、推測せざるを得ない場合が生じる。

いくなれば、著者の「ホラ」には、今後の探究を期待した「仮説」が含まれているものと考えたい。

A四判で、上巻は二四六ページ、下巻は一九〇ページ。どの頁にもカララの挿絵や写真、地図が入っている。筆者の手作り本だという。目次をみると、第一章が私たちのルーツ、第二章が神々の時代、第三章が大師の時代、第四章が武士の時代、第五章が長森が原、第六章が虎の時代、第七章が六日町が生んだ武将、第八章が開田の時代、第九章が村の生